発掘調査報告第30集

県営ほ場整備事業北の原地区埋蔵文化財緊急発掘調査報告

赤須城跡

（第３次調査）

1992.3

上伊那地方事務所
駒ヶ根市教育委員会

例　言

1．本報告書は県営ほ場整備事業（北の原地区）に伴うもので、赤須城跡の調査としては昭和54年度の第１次調査、昭和62年・昭和63年度の第２次調査に次ぐ第３次調査となる。

2．調査は、工事立合い調査を市費により実施し、上伊那地方事務所からの委託及び市補助によって発掘調査を実施している。

3．調査の実施は市教育委員会の組織する駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が赤須城跡第３次発掘調査団を編成し調査に当った。

4．遺構遺物の実測、作図は北澤武志が行った。

5．遺構の写真撮影は北澤が、遺物については友野良一、北澤が行った。

6．本書に使用した赤須城測量図は、県営ほ場整備事業実施以前（昭和49年～50年度）に市立博物館において作成したものを縮尺したものである。

7．本書の執筆は、第３章第３節、第Ⅳ章を友野が、その他を北澤が担当した。

8．本調査に関わる資料は、駒ヶ根市立博物館に保管してある。

調査の組織

〔駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会〕

顧　問　中山　敬久（駒ヶ根市教育委員長）
会　長　高坂　保　（駒ヶ根市教育長）
理　事　友野　良一（市文化財審議委員会会長）
〃　松村　義也（　〃　副会長）
〃　竹村　進　（　〃　委員）
〃　林　赳　（　〃　委員）
〃　吉江　修深（　〃　委員）
〃　新井　徳博（　〃　委員）
〃　河合　龍夫（駒ヶ根市教育次長）
〃　福沢　正浩（駒ヶ根市立博物館長）
監　事　宮脇　昌三（駒ヶ根郷土研究会会長）
〃　下平　基雄（駒ヶ根市収入役）
幹　事　気賀沢喜則（市教委社会教育係長）
〃　中村　敏郎（　〃　社会教育係）
〃　北澤　武志（駒ヶ根市立博物館）
〃　白沢　由美（　〃　）

〔赤須城跡第３次発掘調査団〕

団　長　友野　良一（日本考古学協会員）
調査員　北沢　雄喜（上伊那考古学会員）
（立合い調査）
〃　小町谷　元（上伊那考古学会員）
（立合い調査・発掘調査）
調査主任　北澤　武志（駒ヶ根市立博物館）
作業協力　中村　敏郎（市教委）
北原　純　（　〃　）
（以上立合い調査）
宮沢　国男
宮沢　かつゑ
中村　トミ子
（以上発掘調査）
協力者　吉澤　康道（長春寺）
倉田　文和（市誌編さん室）

目　　次

例言・調査の組織
目　　次
第Ⅰ章　発掘調査の経緯……1
　第1節　発掘調査に至るまでの経過……1
　第2節　発掘作業経過……1
第Ⅱ章　遺跡の環境……4
　第1節　位置及び地形、地質……4
　第2節　歴史的環境……6
第Ⅲ章　発掘調査……11
　第1節　調査概要……11
　第2節　遺　　構……12
　第3節　遺　　物……16
第Ⅳ章　総　　括……18
註・参考文献……19
　出土遺物一覧表……22

図版目次

挿　図　第1図　赤須城位置図……3
　第2図　周辺の遺跡及び市内の城館跡分布図……5
　第3図　赤須城跡測量図……7
　第4図　発掘調査区位置図……9
　第5図　調査区全体実測図……10
　第6図　遺構実測図(1)……13
　第7図　遺構実測図(2)……15
　第8図　出土遺物実測図（陶器・土器）……20
　第9図　出土遺物実測図（石器）……21
写　真　1－1調査前風景、2城上井付近
　2－1城上井肩部、2竪穴状遺構1号、3竪穴状遺構1号
　3－1城上井と竪穴状遺構1号、2第1号住居址
　4－1テラス状遺構、2テラス状遺構、3竪穴状遺構2号と溝状遺構
　5－1竪穴状遺構2号と溝状遺構、2溝状遺構と四の堀
　6－1四の堀落込み、2N10付近焼土分布、3四の堀肩部と出郭、4四の堀水路設置状況
　7－1出土遺物(1)
　8－1出土遺物(2)

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至るまでの経過

平成３年３月、県営ほ場整備事業北の原地区による道路の整備事業を赤須城に関わる地籍内で行いたいとの連絡を受け、平成３年３月25日に長野県教育委員会文化課、上伊那地方事務所土地改良第２課、駒ヶ根市教育委員会の三者で緊急に現地協議を行い、道路側溝部については工事立合い調査及び発掘調査を、四の堀内を通す排水路については工事立合いをする旨の指導が県教委よりあった。工事は４月17日から始まり、同日から５月24日まで立合い調査を行い、工事を中断し、平成３年６月24日から７月24日まで発掘調査を実施した。遺物の洗浄と注記を11月に行い、報告書の作成は平成４年３月に行った。

第２節　発掘作業経過

（立合い調査）

４月15日　(月)　調査前写真撮影。本日より工事開始。城上井の橋部分付け換えのため重機による掘削が始まる。調査で使用する測量用の基本杭を水路脇に設置する。

４月17日　(水)　今週中は水路の枡型工事を行うとのことであったが、現場業者の手違いにより発掘調査を行う予定地の掘削が行われていた。幅約70cm長さ29ｍ深さ40～50cmにわたる誤掘りによって、一部黄褐色テフラ層が現れていた。壁面で天目茶碗破片を採取する。現状の写真を撮り、県教委、上伊那地方事務所等に連絡。重機による橋下掘削は終了し、遺物の出土無く、井の肩部の線も現れていないため、井の位置の確認は手掘りで東より追ってみることとする。

４月18日　(木)　雨のため、団長・市教委との打ち合わせ。

４月19日　(金)～４月23日(火)　誤掘りの部分は、やむなく現状でできる範囲の調査を行うこととなり、下面の浮土を除いた後、黄褐色テフラ層まで掘り下げ、平板実測を行う。壁面は清掃後、N(1)～N(4)の断面実測・写真撮影を行う。この区間では遺物６点の出土と、遺構では柱穴を含むピット、及び壁面で住居址を確認した。また漆喰で壁を固めた肥溜も出ている。なおこの間、N(4)～N⑽で重機による掘削があり工事立合いを行いつつ掘り下げも開始する。工事面より過掘りとなるため開発側との調整も行う。遺物№16まで取り上げ。

４月24日　(水)　N(4)～N(5)間の石・礫の出る箇所を調査。テラス状の立上がりとなり、何等

かの遺構である可能性がある。道路南側溝部の工事重機による掘り下げ立合いを行う。道路南側溝部分で、現道の石積みのさらに南側に石積みが認められたため側溝部南半は残してもらう。

4月25日　(木)　N(4)～N(6)平板実測。仮ベンチマーク設定。北調査区で城上井の東に落込みを認め、掘り下げを開始。

4月27日　(土)　N(4)～N(5)断面実測。北調査区で城上井の掘り下げ。第1号住居址の清掃を行い、床面及び柱穴を確認する。

4月28日　(日)　午後からN(4)～N(5)断面実測の続きを行い完了する。

4月30日　(火)　新規道路の排水を落とす四の堀の部分の工事立合い。深さ30～40cm程度の掘削で堀底に至らず、礫多数が現れていたが基盤礫層が崩れて堀を埋めたものと判断しコルゲートの埋設を開始してもらう。N(5)～N(6)断面実測。調査区清掃後写真撮影。

5月1日　(水)　四の堀排水路工事立合い及び写真撮影。礫に黄褐色テフラ土が混じるが、これも上からの流入と思われる。南調査区の写真撮影。遺物No.17～18取り上げ。
　午後遺物の一部の洗浄・注記を行い、団長に鑑定依頼。

5月2日　(木)　午後降雨。北調査区で城上井の掘り下げをさらに行い、黄褐色テフラ→黄褐色テフラ＋礫の境界線が明らかになり、井の肩部とみなす。柱穴6か所の調査を行う。柱穴の一つから内耳土器1、石英片7ケが出土する。遺物取り上げNo.21～24。

5月10日　(金)　N(7)～N(10)平板実測。南調査区工事重機掘り立合い。

5月11日　(土)　N(4)～N(10)清掃後写真撮影。N(9)～N(10)断面実測。

5月12日　(日)　午後雨。N(7)～N(8)断面実測。

5月13日　(月)　関係各機関との連絡調整。

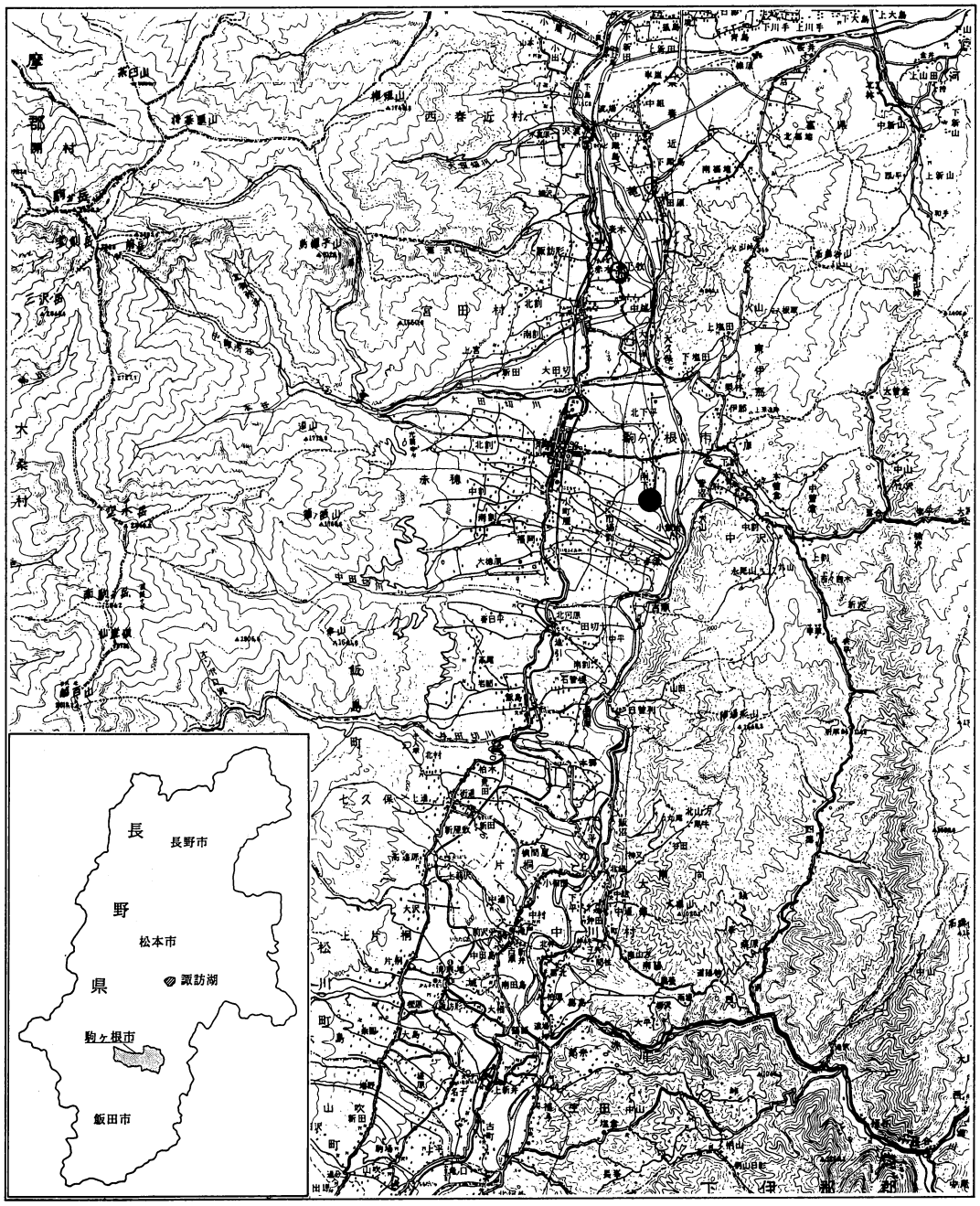
5月14日　(火)　北調査区平板上レベル測定完了。南調査区旧石積を出す作業。

5月15日　(水)　団長による石積観察。石の積み方から少なくとも江戸末期より新しいものであると判断。露出させ写真による記録の後、石を除いて下の調査を行うこととする。

5月22日　(水)　南調査区旧石積を出す作業。調査の便宜上旧石積を西からA、B1～B5、C1～C2に区分する。A区で石積みが比較的残っているが、ほとんどで崩れており、過去に城上井改修の際出た石を積んだという現道脇にあった新しい石積の積み石と混ざってしまっている。

5月23日　(木)　石積部清掃後写真撮影。

5月24日　(金)　北調査区の遺物取り上げNo.25～35及び表採遺物。本日までで立合い調査を終了し、石積下の調査は発掘調査で行うこととする。



第１図　赤須城跡位置図（Ｓ＝１：200,000）

（発掘調査）

6月4日 (火) ～6月6日(木)	表土の除土及び石積の除去。土処理は、土は他所へ石は畑の上に上げる。
6月22日 (土)	器材運搬。
6月24日 (月)	午前中テント設営。午後雨。
6月25日 (火)	開始式の後、掘り下げ及び壁面削り。
6月26日 (水)	北調査区の掘り下げ及び清掃。
6月27日 (木)	北調査区清掃後写真撮影。南調査区掘り下げ。四の堀西に溝状の落ち込みあり。
6月28日 (金)	出郭部南北調査区掘り下げ。北調査区から焼土。本日までで主なる掘り下げを終わる。四の掘付近の写真撮影。
6月29日 (土)	打ち合わせ会及び器材整理。Ｓ１～Ｓ２断面実測。
7月2日 (火) ～7月17日(水)	Ｓ２～三の堀まで、Ｎ１～Ｎ５まで断面実測。及び部分的掘り下げ。
7月18日 (木)	平板実測、城上井付近。
7月19日 (金)	平板実測Ｓ１～Ｓ６。
7月20日 (土)	平板実測Ｓ６～Ｓ17。
7月22日 (月)	平板実測Ｎ１～三の堀まで、Ｓ17～三の堀まで。四の堀断面はレベルで測定。
7月23日 (火)	断面実測Ｎ７～Ｎ９。
7月24日 (水)	平板実測Ｎ４～Ｎ５及びＳ18～Ｓ20。断面実測Ｎ９～三の堀まで。清掃後写真撮影。清掃中柱穴を発見。溝状遺構掘り下げ。再び写真撮影。
7月26日 (金)	器材整理及び撤収。

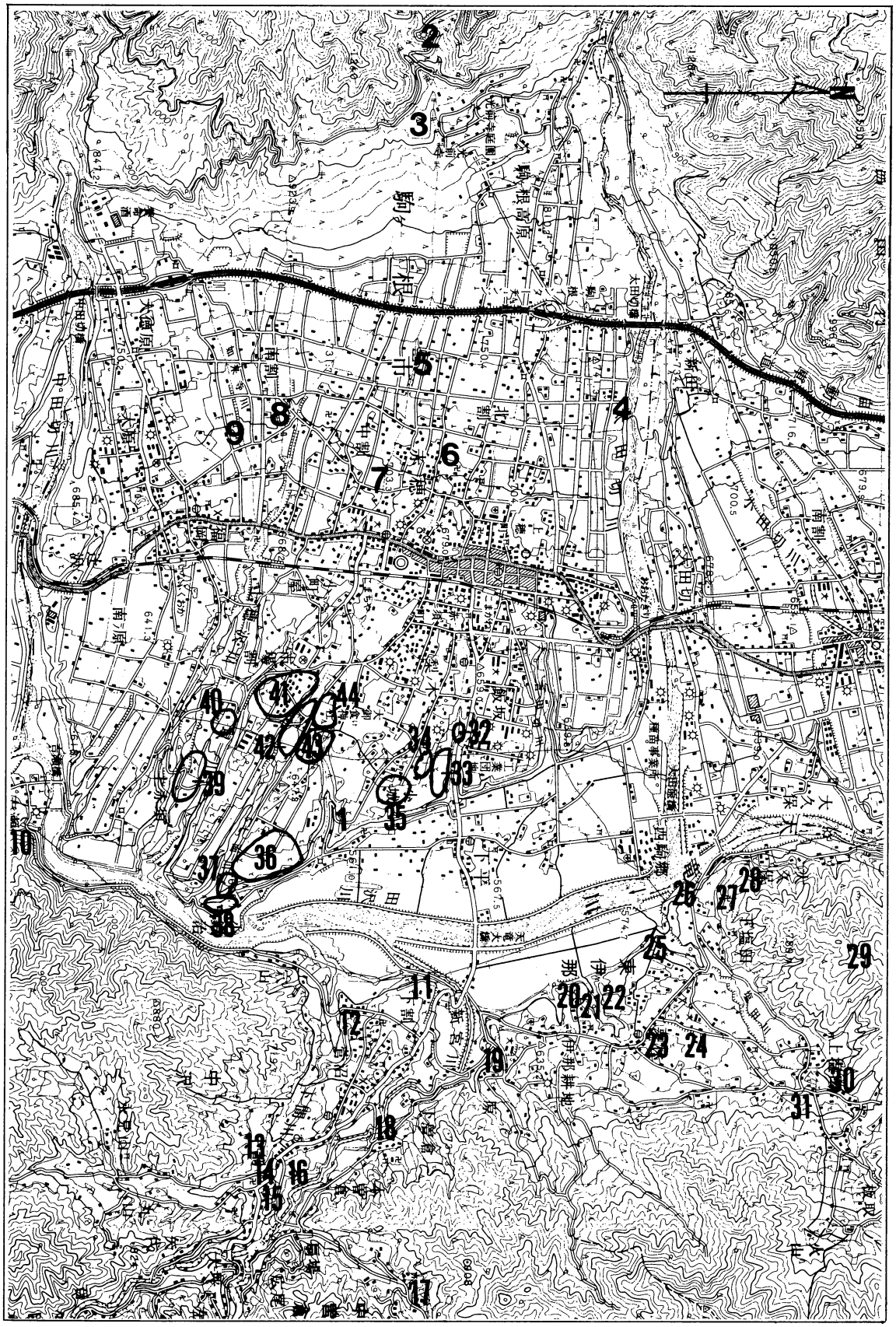
第II章　遺跡の環境

第1節　遺跡の位置及び地形・地質（第1図）

赤須城跡はＪＲ駒ヶ根駅から東南東に2㎞の駒ヶ根市下平500番地代に所在する。標高は620～630ｍである。天竜川右岸河岸段丘の突端に立地し、段丘の地形を巧みに利用し作られている。

城跡南側は宮沢川が流れ、自然の堀として利用されている。宮沢川から1㎞程北には田沢川が流れている。この天竜川へ注ぐ二河川によって段丘が浸食を受け、一つの区画を形成している。

東側は段丘崖で、天竜川右岸の湿地帯からの比高差は60～70ｍを測る。西側は西から東へと向かう緩やかな傾斜をもつ平坦な段丘面が広がっている。



第２図　周辺の遺跡及び市内の城館跡分布図（Ｓ＝１：50,000）

城の主要な郭は天竜川へ向かって張り出した宮沢川左岸の段丘尾根部に位置し、そこから西または北へと広がりを見せている。城郭の規模は現在までの地形測量、発掘調査によって確認されている範囲では東西650ｍ、南北500ｍだが、城関連地名の研究から、城の関連領域はさらに広がりをもつものと思われる。

遺跡の地質基盤は伊那礫層で、その上に新期テフラが堆積している。礫層上部は20cm大の花崗岩・砂岩多数及び灰褐色砂質土から成ることが観察されている。

第２節　歴史的環境

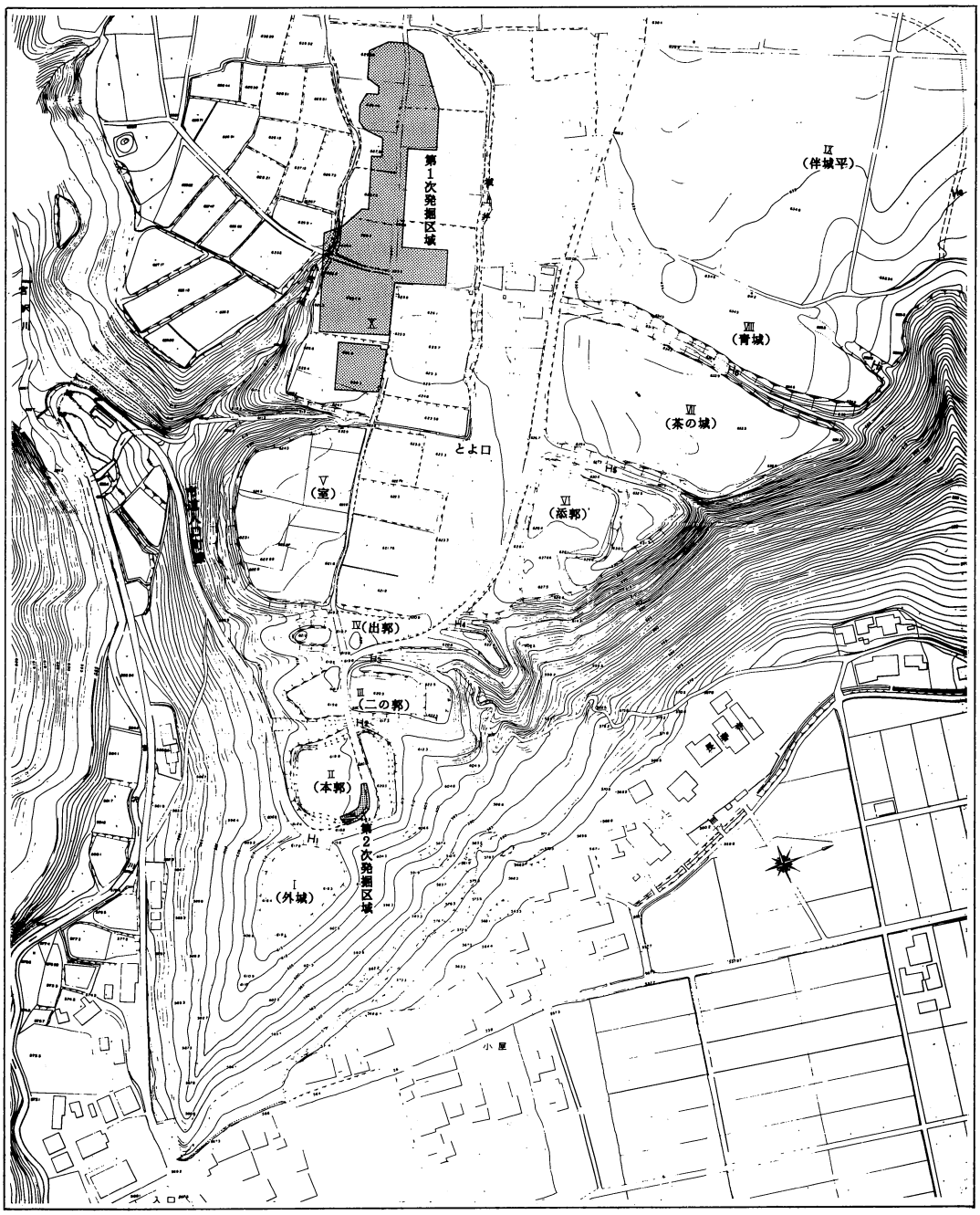
１．周辺の遺跡（第２図）

第２図中１～31は市内に残る狼煙台・物見台等を含めた城館跡である。１は赤須城、２は古城、３は荒城、４は大田切城、５は塩木城、６は上穂城、７は大北城、８は大城、９は射殿城、10は吉瀬の城山、11は古城、12は菅沼城、13は小山第Ⅰ、14は高見城、15は白山城、16は香花社、17は中村城、18は曽倉城、19は原城、20は稲村古城、21は稲村城、22は遊光城、23は小城、24は城村城、25は高田城、26は大久保城、27は善福寺、28は箱畳の秋葉様、29は物見ヤ城、30は塩田城、31は青木城で、この他に中村城の東２kmには中曽倉城山がある。市内の城館跡は一部で調査が行われた外は、その内容が明らかになっていないものが多い。なお後述する赤須郷の範囲内に現存する城跡は赤須城のみで、赤須郷より西の上穂（うわぶ）郷には８か所の城館跡が知られている。

赤須城周辺の遺跡としては、32は「寺屋敷」の地名が残り、段丘下へ移転する前の長春寺（註１）があったと伝えられる長春寺跡遺跡、33は赤須氏の家臣田沢左近の居館があったと伝えられる田沢遺跡、34は赤須氏の武将の梅ノ木左衛門尉の居館跡との伝承のある梅木遺跡、35は団地造成時八の堀が確認された伴城（ばんじょう）平（番匠平）遺跡、36は小鍛治古墳群、37は雨堀遺跡、38は小鍛治遺跡、39は昭和53年に発掘調査が行われ、古墳時代後期～平安時代中頃までの集落と古墳１基を検出した中通り下遺跡、40は中通り上遺跡（歴史時代）、41は昭和52年に一部の発掘調査が行われ、縄文～平安時代の大集落であることが分かってきた原垣外遺跡、42は昭和54年に発掘があり、奈良～平安時代の集落を確認した七免川遺跡、43は平安時代の集落跡である御射山遺跡、44ははは大御食（おおみけ）神社を中心とする美女ヶ森遺跡などの各遺跡が分布している。

２．赤須郷と赤須氏

赤須郷の成立については「駒ヶ根市誌（古代・中世編）」による考察がある。これによると建武二年(1335)に赤須為成の作成した「赤須大境」証文（福岡東文書）中の郷の境の西北隅と西南隅には置き石と埋め炭が置かれているとの内容から、この四至牓示（ぼうじ）は「平安時代の荘園形成期に国衙領など他領と荘域を区別する目的で置かれたもので、こうした牓示の記述が証文にみられるのは赤須郷の成立期の古さを物語っている。」としている。さらに証文中に「…赤須郷ノ田町ノ



第3図　赤須城跡測量図（S＝1：4,000）

数・惣役等・四方ノ堺、寛治貳年(1088)書置ニ見リ…」の記述があり、赤須郷の成立は平安時代まで遡ることができそうである。

また応永元年(1394)の「赤須郷公田惣田数□」証文」（下平松崎文書）、そして同証文では嘉暦二年（1327）書誌を典拠としたとしていることから、建武の証文と併せると平安・鎌倉・南北朝・室町時代と赤須郷の郷域には変動がなかったと考察している。応永の証文には「春近公田六段半幷ハシノメン（土師免）田六反」とあり注目される。

赤須郷の境界について証文の記述を市誌で検証しているので以下に引用する。

〔北境〕　「ウシロ澤ノツル子」（西駒ヶ岳東麓後沢の峰つづき、池山付近）－「箱石」（東伊那大久保箱石神社付近）を結んだ線で、大田切川筋にほぼ合致する。

〔東境〕　「箱石」－「ナキハヽノヒキスエ」（梛羽場、中沢下割古城付近）－「小鍛冶ノマルツカ」（南下平小鍛冶丸塚）を結んだ線とその南側の「天龍トヲリ」（天竜川筋）で、大略天竜川筋に沿っている。

〔南境〕　「上井ノ口」（現在位置不明）－「モロノ木」（不明）を結んだ線とその東側の「フル河」筋（辻沢川か）で、中田切川筋そのものではないが、左岸断崖上の辻沢川筋に近いものになっている。

〔西境〕　「駒坡原ノ古道」（宮田村駒ヶ原）－「大田切ノ西ノホラサカイ」（北割北原の大田切放下地籍付近か）・「山伏（臥）ツカノ西ナルフルミチ」（富士山道ないしはこれに並行した道か、山伏塚は位置不明）－「経ツカ」（北割馬場経塚原）－「大道」（上穂本線か）を結んだ線で、現在市域に残る上穂本線と富士山道にほぼ沿ったもの。

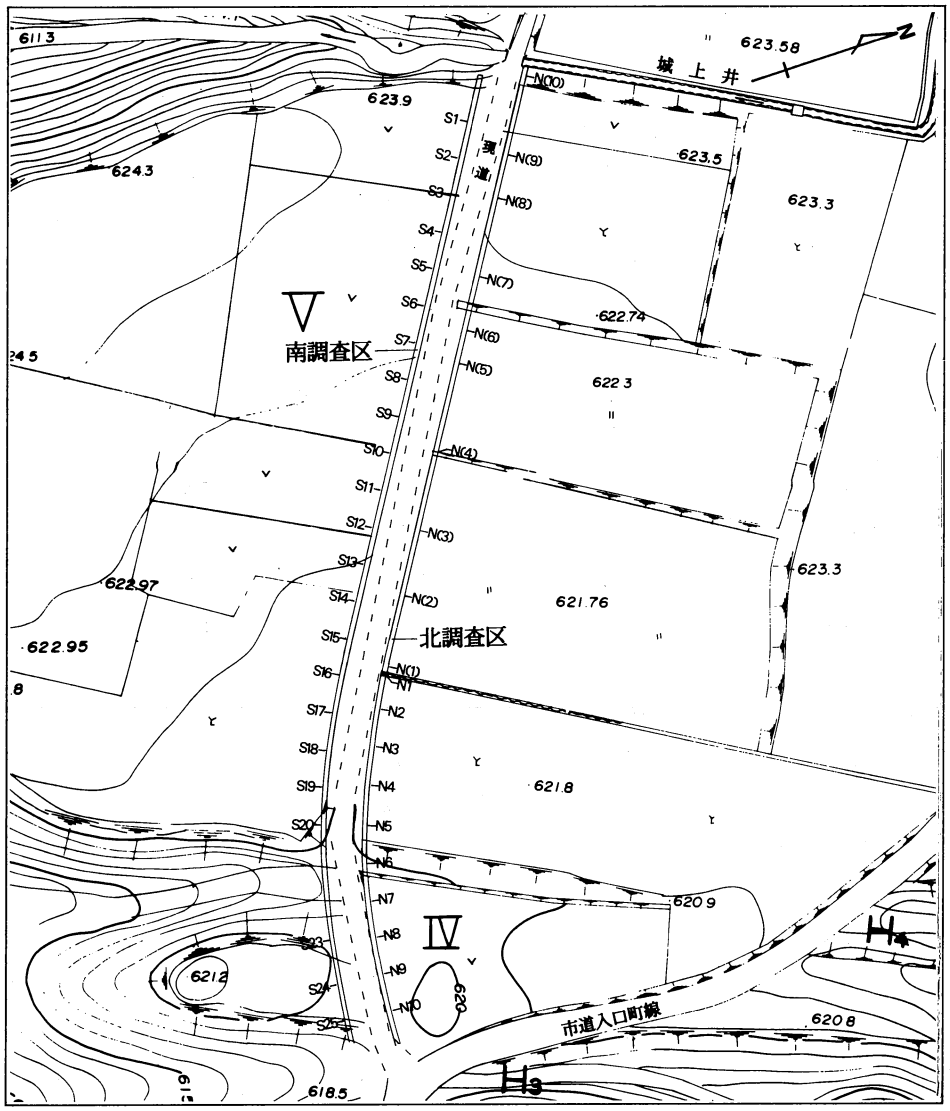
赤須（栖）氏については、片切郷（松川町片桐）を本拠とする片切氏一族であった為信を赤須氏始祖とする説が今日では有力である。諸説あるが赤須氏は片切氏の支族であったという点ではほぼ一致している（註２）。鎌倉時代に年次不明であるが、赤栖（須）三郎入道の遺領をめぐる兄弟相論があった事件以降、様々な文献に赤須氏の名を見ることができる。

３．赤須城の概況（第３図）

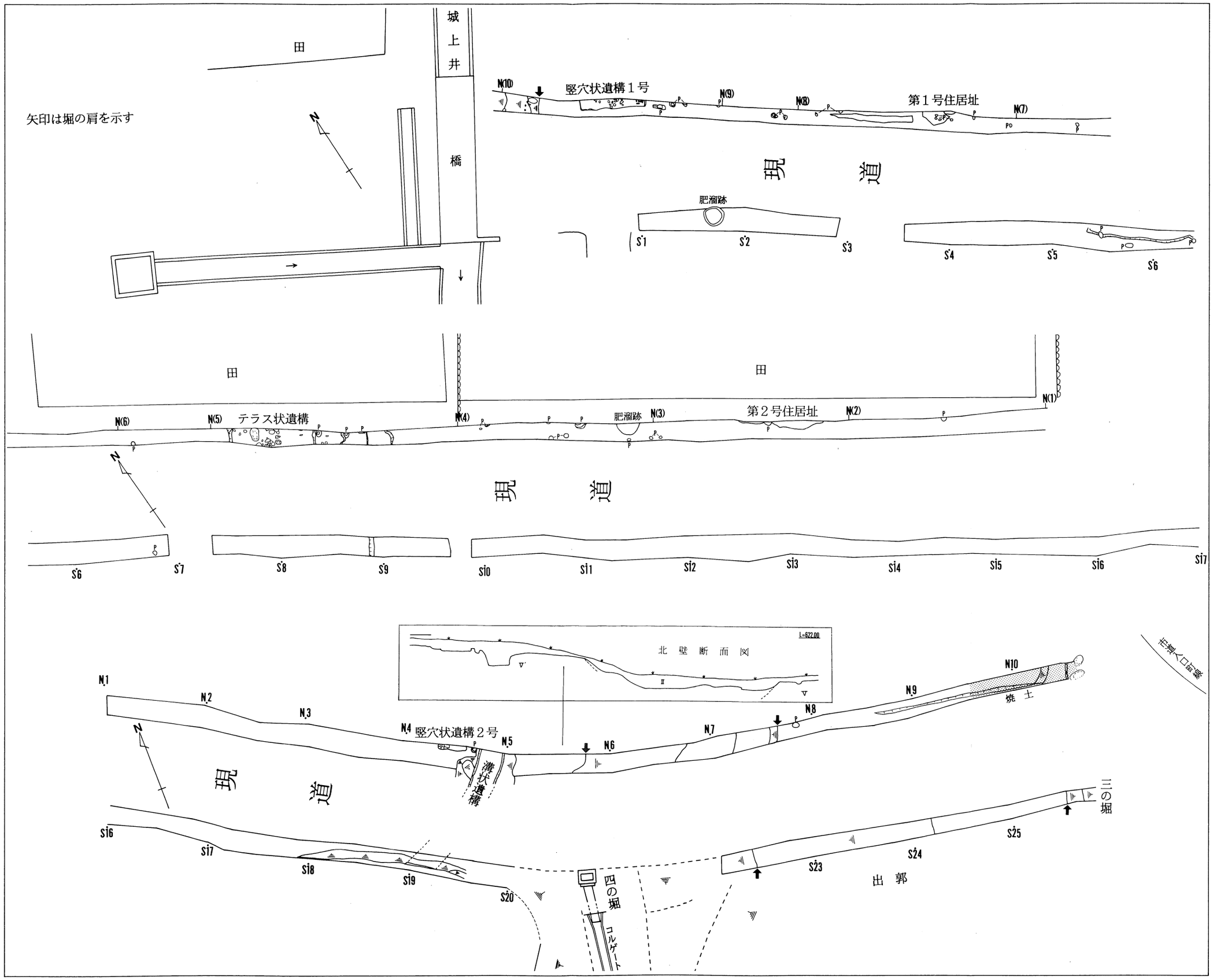
赤須城は伊那谷に特有な河岸段丘を利用して作られた連郭式の平山城である。城の南側は宮沢川の浸食谷を自然の堀として利用しており、段丘上には８条の堀が現在までに確認されている。

研究者の便宜上、東から一の堀～八の堀（図中Ｈ１～Ｈ８）と呼ばれている。三の堀の北側を下れば長春寺に至り、四の堀の南の堀底道は「入口」集落に通じる。また、昭和54年にＸ区の発掘調査があり、現在の東西の道の下に幅３ｍ程の縦堀があることが確認されている。

８条の堀によって縄張された区画はやはり研究者の便宜上、「外城」（第７図のⅠ）、「本郭」（Ⅱ）、「二の郭」（Ⅲ）、「出郭」（Ⅳ）「室」（Ⅴ）、「添郭」（Ⅵ）、「茶(ちゃ)の城(き)」（Ⅶ）、「青城(あおき)」（Ⅷ）、「併城平(ばんじょうだいら)」（Ⅸ）と呼ばれている（註３）。「本郭」から「添郭」にかけては



第４図　発掘調査区位置図（S＝1：1,000）



第５図　調査区全体実測図（Ｓ＝１：200）

土塁を認めることができる。城跡の北側の段丘崖にはわずかながら帯郭の痕跡が認められ、「外城」から南東に伸びる尾根上にもそれらしき痕跡がある。西から引水されている「城上井」は「とよ口」で直角に曲げられて宮沢川に落ちている。また水の手では三の堀を下り、北側の段丘崖の中腹に涌水のある箇所がある。

赤須城に関する最近の調査は、昭和49年に友野良一氏・気賀沢進氏が中心となって城跡の全面的な地形測量を行い、昭和54年には県営ほ場整備事業に伴う第１次発掘調査が行われ、Ｘ区で六の堀の続きの他に「本部」へ向かう縦堀を検出し、その周辺で住居址２、建物址11、小竪穴24（集石のあるものも含む）、室状遺構２、溝状遺構１を確認している。さらに昭和63年～平成元年にかけて市道入口町線道路改良工事に伴い、「本郭」の東及び南側で第２次発掘調査が行われている。この時には土塁の断面調査により郭の拡張のあったことが分かり、郭の南下ではテラス状の遺構及び柱穴を検出している。この他に昭和62年には地名・文献からの検討を行った調査報告書が刊行されている。なお昭和52年３月28日付で主要な郭等が市の史跡指定を受けている。

第Ⅲ章　発掘調査

第１節　調査概要（第４・５図）

調査区の設定は、新規道路両側の側溝部分をそれぞれ北調査区・南調査区として、調査の都合上、任意に北調査区をN(1)～(10)及びＮ１～10に、南調査区をＳ１～24に仮区分して調査を実施した。なお調査中に両側の田畑への通路を確保する必要があり、北調査区では掘り下げ後、埋土して確保したが、南調査区では一部調査区より除外してある。測量は平面を平板測量で実測し、土層断面は北調査区では北壁を南調査区では南壁の断面を区分ごとに実測し、写真撮影による記録も区分ごとに記録している。

調査による掘り下げは黄褐色テフラ面までとして、堀の部分は堀り幅が狭いため堀底までの掘削は実施せず、堀の肩部を確認することに努めた。標高値は値の求められている工事用のベンチマークから測定し使用した。

土層の区分は次のとおりであるが、概ね黄褐色テフラ層の上に耕土が乗る単純な堆積である。

Ⅰ層－黒褐色土（水田耕土）、Ⅱ層－黒茶褐色土（畑耕土）、Ⅲ層－茶褐色土（漸移層）、Ⅳ層－暗茶褐色土（漸移層）、Ⅴ層－黄褐色テフラ土（ローム）、Ⅴ′層－ブロック状に硬い塊が入る黄褐色テフラ土、Ⅵ層－暗灰褐色砂質土（砂・礫を多く含む）。

今回の緊急調査は工事の計画されている道路の側溝部分のみの発掘であったため、遺構の全貌を知ることは困難で、調査区にかかる遺構の存在を知るのみにとどまった。

確認できた遺構は、城上井、四の堀の位置、住居跡２、竪穴状遺構２、溝状遺構１、テラス状遺構１、柱穴29である。今回の調査では五の堀より西で発見された東西の縦堀の確認はできなか

ったが、現道の両側に住居、建物等の施設を確認でき、「室」区域に広がりを持つことが予想できる。出土遺物は表面採集のものも合わせ陶器片67点、土器片21点、石器類11点、その他４点であった。陶器のほとんどは15～16世紀のものである点は、これまでの発掘調査結果と同様であり、縄文時代の石器もわずかに見られ、付近にこの時期の遺跡があったものと思われる。

第２節　遺構（第５・６・７図）

１．城上井の位置及び竪穴状遺構１号（第６－１図）

城上井の堀込み肩部は緩やかに下る黄褐色テフラ土から黄褐色テフラ土＋砂礫土となる変換線が認められ、この線から落ち込みが始まるものと思われる。現在この部分の城上井は幅1.８ｍのコンクリート水路となっており、水路東端部から３ｍ離れた所に肩部が位置する。土層の堆積状況は畑耕土のII層が流れ込んで堆積しており、上部では水路工事の時の攪乱のＶ層が入っている。

以上の状況から下部の砂礫層は井の流水による堆積と考えることができる。図示した所より西側は水路工事の攪乱が著しかった。

井の肩の線から２ｍ東に竪穴状遺構（註４）がある。形状は不明であるが東西の幅は3.2ｍ、深さは約70cm程度である。覆土は下部に炭及びテフラ粒を含む砂礫土VI層が厚く堆積し、その上部に流れ込みによるII層が堆積している。礫は花崗岩、砂岩で、集石としてとらえるのか、あるいは城上井の氾濫による流れ込みによるものか判別し難い。竪穴状遺構の東側には柱穴が５か所近接してある。出土遺物は竪穴状遺構からの出土は無く、東側の柱穴中からはNo.24の炭化物が、柱穴の間のテフラ上から雲母が極わずかな白い花崗岩２ヶが出土している。また竪穴状遺構から東側3.5ｍの位置にある柱穴中からは花崗岩７ヶとNo.23の内耳土器が出土している。

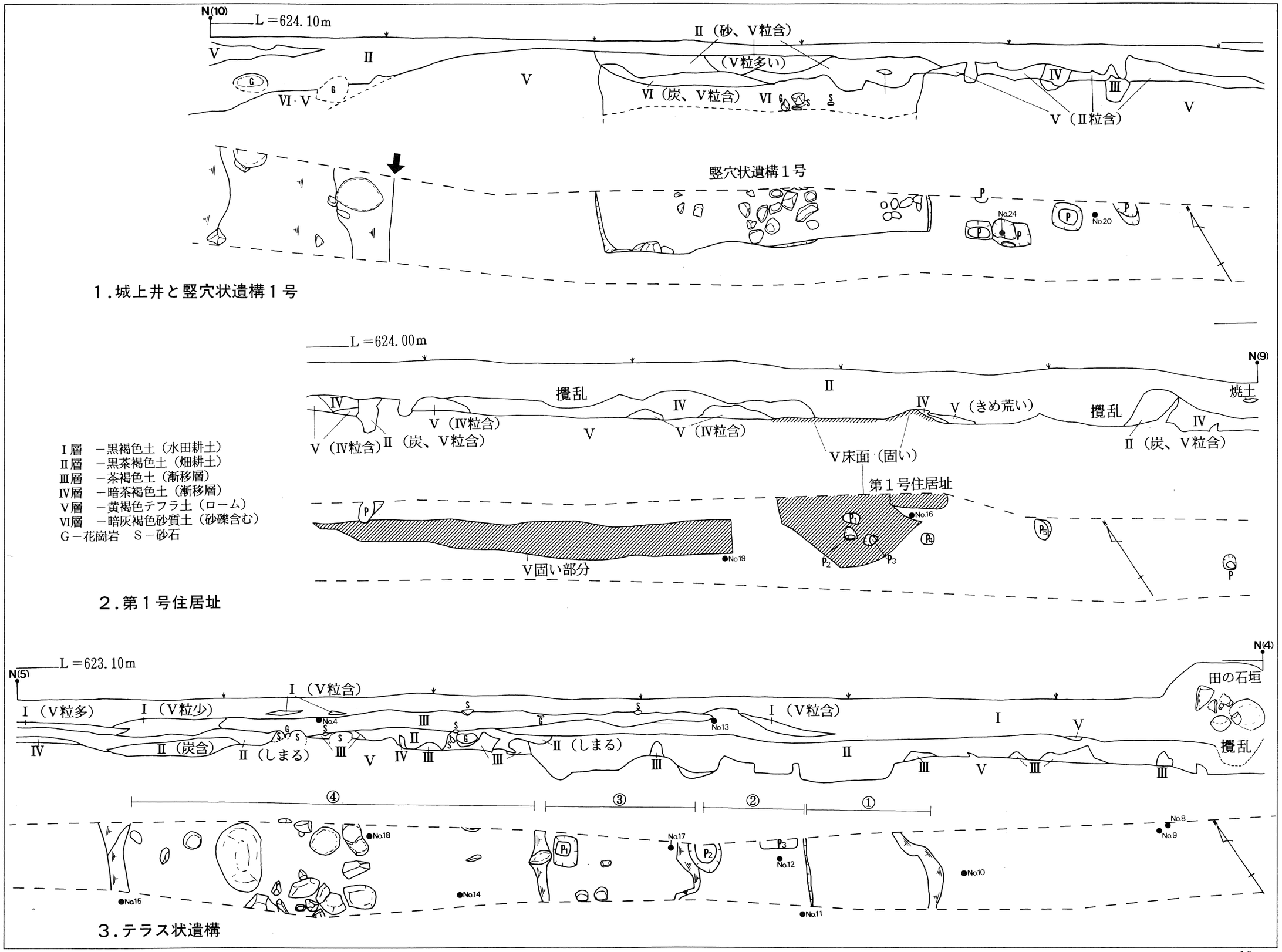
２．第１号住居址（第６－２図）

床面の一部と柱穴を確認できただけで、形状、規模は不明である。断面では漸移層のIV層がとぎれている範囲内に遺構があったと推定できるが、桑畑による攪乱を受けており判然としない。

柱穴の深さはＰ１－11cm、Ｐ２－14cm、Ｐ３－12cm、Ｐ４－11cm、Ｐ５－15cmである。なお住居址の西側には長さ４ｍにわたってテフラ面に固い部分が認められた。出土遺物はNo.16の甕と16Ｃの灰釉碗がテフラ上に出土しているが、住居址に伴うものかどうかは不明である。

３．テラス状遺構（第６－３図）

その機能は不明であるが、段差をもつ遺構であることからここではテラス状遺構と呼称することとする。この遺構とは規模が異なるが、第２次調査の時にも本郭の東で柱穴を伴うテラス状遺構が傾斜地に確認されている。本遺構の全長は８ｍで①～④の４段の面を持ち、凸凹があるものの①～③面が各約1.3ｍ、④面が3.9ｍを測る。各面は調査区の両側にまだ続いているものと思われる。



第６図　遺構実測図（１）（S＝1：40）

各面の段差は①面の東側で東から西への落ち込みとなる外は、東から西へ立ち上がる。段差は①の東側で15cm、①②の間で15cm、②③の間で10cm、③④の間で15cm、④の西で10cmと落差はさほど無い。②面にピット２、③面にピット１があり、④面の石の集中する箇所は石積と思われ、崩れて石が散らばっている様相を呈している。出土遺物はテフラ土上に４点、覆土に４点が出土し、時期は15～17Ｃ以降のものである。断面から判断すると、遺構は黄褐色テフラ土Ⅴ層を堀込んで作っており、漸移層Ⅲ、Ⅳ層は所々残っていて、遺構面の上は畑耕土Ⅱ層が堆積し、表土は水田耕土Ⅰとなっている。

４．第２号住居址（第７－１図）

床面の一部と柱穴１を認めたのみで形状、大きさとも不明であるが、断面に堀込みの立上がりを見ることができる。断面に現れた立上がりの間は、4.9ｍである。柱穴はその大きさから主柱穴と思われる。断面ではⅤ層の堀込み内をⅠ・Ⅱ層の混土が埋め、その上に畑耕土Ⅱ層が薄く堆積し、表土は現在の水田土であるⅠ層となっている。調査区の北側の田は北の土を切り、南に盛って田面を作ったとのことで、Ⅰ・Ⅱ層の混土はその時の造成によるものと思われる。出土遺物はⅠ層中に16Ｃの天目茶碗が、Ⅱ層中にやはり16Ｃの天目茶碗が、Ⅰ・Ⅱ層中に15Ｃの内耳土器が出土している。

５．竪穴状遺構２号及び溝状遺構（第７－２図）

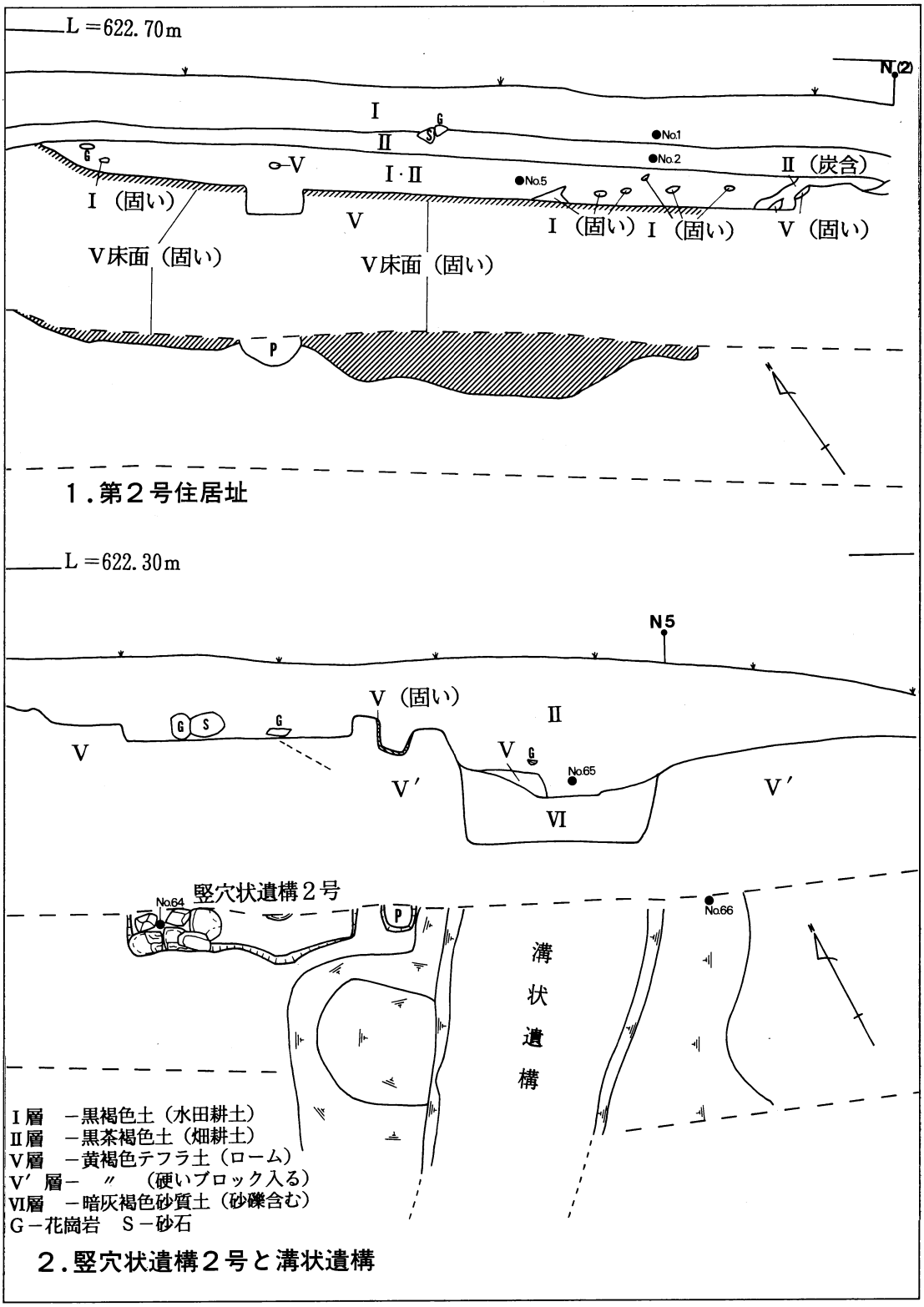
竪穴状遺構２号は調査区に一部がかかるのみで全容は調査できなかった。東西の幅が1.4ｍ、深さ12cmで、西寄りに集石を持ち、比較的小規模で浅い竪穴状遺構に類する。溝状遺構との間に柱穴があり、穴の中は堅く叩き締められていて深さは20cm程度である。出土遺物は集石の間から15Ｃ～16Ｃの内耳土器が出土している。

溝状遺構は幅1.1～1.4ｍで深さは40～50ｍ、箱形の堀込みである。また遺構の西側にはすり鉢状の浅い堀込みが認められた。両側はⅤ′層、底面は礫で、砂礫混じりのⅥ層が中に堆積し、その上にⅤ層の流れ込みが西からあり、上はⅡ層が厚く覆う。遺物は覆土Ⅱ層中に15Ｃの灰釉鉢と遺構の東側から土師器が出土したのみである。また現道をはさんで向かい側のＳ19付近の断面に幅1.5ｍ、深さ約15cmの堀込みらしき跡があり、そこに向かって本遺構が伸びている様子があったため一応溝状遺構としてとらえた。

なお、硬い塊が混じるⅤ′層は黄褐色テフラ土を人為的に盛り固めた土であって、四の堀を掘削した時のものである可能性が強い。竪穴状遺構及び溝状遺構はⅤ′層の存在から四の堀の造成後に作られたと考えることができる。

６．その他の遺構等（第５図）

四の堀は北調査区で堀幅が9.5ｍ、東の肩と西の肩との比高は1.3ｍである。溝状遺構の東壁はⅤ′層であり、東へ行くに従って除々にⅤ層となり、肩部から内側では黄褐色テフラ土混じりの砂



第７図　遺構実測図（２）（S＝1：40）

礫が堀内を埋めている。堀の東側は砂混じりのⅤ層土である。（第５図中北壁断面図参照）

出郭は南調査区において、東西幅約15.5ｍで、20cm程の腐食土が堆積している下は砂の混じるⅤ層土となっていた。

Ｓ６付近には東西約７ｍにわたって調査区北側に20cm程度の落込みと３箇所の柱穴を認めたが調査区にわずかにかかるのみで何であるのかは不明である。付近では14Ｃの常滑壺や15～16Ｃの陶器・土器４点が出土している。

Ｎ９、Ｎ10付近には東西約９ｍにわたって南と東に０～20cm程度の段差が認められる箇所があり、東半部分は表面が焼けていた。土質には違いが見られなかったが、あるいは緩やかな傾斜地に土を盛って平坦な地面を作ったものとも考え得る。出土遺物はNo.70～73が出土している。

またN(3)～N(4)（断面で確認）、Ｓ１～Ｓ２、Ｓ８～Ｓ９の間で３箇所、漆喰で壁を固めた比較的最近の物と思われる肥溜が出土している。（北澤）

第３節　遺物

１．陶器・土器等（写真７・８）

写真図版によって以下、出土遺物の観察を述べることとしたい。

（写真７上段）

No. 2－天目茶碗。産地は瀬戸。底部を欠いている。体部の立上がりが強い方で、口唇部はほぼ直立し、端部は丸く収まる。高台周辺を除き鉄釉が施されている。時期は大窯３期頃。

No.44－天目茶碗。産地不明。口径約11cm。口唇部は外反している。鉄釉が施されている。

No.58－灰釉皿。産地は瀬戸・美濃。口径約11cm。体部下方はやや丸みを帯びている。釉は灰釉。

No. 7－灰釉鉢。産地は瀬戸・美濃。口径約20cm。体部上方の立上がりは強い方。口唇端部は丸く収めてある。

No.63－皿。産地は美濃。底径約6.4cm。付高台。内面に菊花文。時期は16世紀。

No.40. 41. 42－壺形陶器。産地は常滑。口径約11.3cm。自然釉。時期は14世紀。

No.H1－碗の底部。底径約４cm。削り出し高台。底部辺はサビ釉。内面に灰釉が施されている。

No.33－志野皿。産地は美濃。口径約11cm、底径約６cm。体部下方はやや丸味を帯びるが上方端は丸く収まる。削り出し高台。時期は16世紀末。

No.39－擂鉢。口縁部。外面は若干くぼんでいる。体部以下は回転ヘラ削り痕が認められる。全面にサビ釉が施されている。

No. 4－擂鉢。産地は瀬戸・美濃。底径約８cm。底部の破片。釉薬はサビ釉が施されている。

No.27－擂鉢。産地は瀬戸・美濃。口縁部破片。サビ釉が施されている。

No.38－擂鉢。産地は美濃。口縁は外方に折り返している。体部は直線的に開いている。体部下方は回転ヘラ削り痕あり。全面にサビ釉が施される。櫛目は９本前後を１単位としている。

（写真７下段）

No.H14－擂鉢。産地は瀬戸・美濃。底部に近い破片。体部の立上がりは直線的に開く。体内外は回転ヘラ削り痕が見られる。全面にサビ釉が施される。櫛目は18本前後を１単位とする。

No.13－甕。産地不明。体部の破片で内外に回転ヘラ削り痕が認められる。時期は17世紀以降。釉薬は鉄釉が施されている。

No. 1－天目茶碗。産地は瀬戸・美濃。底部上の破片で、釉薬は天目釉。高台上部はサビ釉。

No.16－甕。産地不明。体部の破片であると思われる。回転ロクロ痕が認められる。

No.12－擂鉢。産地は瀬戸・美濃。口縁部破片で、サビ釉が施されている。時期は17世紀。

No.11－灰釉碗。産地は瀬戸。口縁部破片。体部はやや丸味を帯び、口縁は直に立上がり、口唇は丸く収めている。時期は16世紀。

No. 5－灰釉皿。産地は瀬戸。底部削り出し高台。釉は全面に施されている。

No.19　－灰釉碗。産地は瀬戸。口縁部破片。

No.65－灰釉鉢。産地は美濃。底部に近い箇所の破片である。釉は灰釉が施されている。

No. 9－内耳鍋。産地不明。体部の破片。時期は15世紀頃。

No.18－内耳鍋。産地不明。体部の破片。時期は15世紀頃。

No.66－土師器。産地不明。時期不明。

No.17－碁石？。時期不明。

（写真８上段）

No.28－灰釉皿。産地は瀬戸・美濃。底部は削り込み。重ね焼痕が見られる。時期は16世紀頃。

No.H17－甕。産地は常滑。体部の破片。自然釉が認められる。時期不明。

No.61－鉢。産地不明。口縁部破片。体外面に長石釉が粒状に出ている。内側は鉄釉が施されている。時期は明治以降か？。

No.H18－甕。産地は美濃。体部の破片。色調は赤褐色。釉は自然釉の垂れが見られる。時期は16世紀以降。

No.50－内耳鍋。口縁部破片。

No.31－天目茶碗。産地は瀬戸か。。体部の破片。時期は18世紀以降。

No.71－鉄釉碗。産地瀬戸。体部の破片。時期は18世紀以降。

No.30－擂鉢。産地は瀬戸・美濃。底部の破片。一部に櫛目痕が認められる。時期は16世紀頃。

No. 3－擂鉢。産地は瀬戸・美濃。底部の破片。底部に糸切痕が認められる。時期は16世紀頃。

No.46－土師器。内黒。坏の破片。時期は11世紀頃。

No.H20－天目茶碗。産地は瀬戸・美濃。体部破片。一部にサビ釉が認められる。時期は15世紀頃。

No.H 7－碗。産地不明。口縁部破片。無釉。時期不明。

No.36－擂鉢。産地は美濃か。底部の一部と体部の下部の破片。櫛目は10本前後。釉薬はサビ釉が全面に施されている。時期は16世紀頃。

No.23－内耳鍋。口縁部の破片。時期は16世紀頃。柱穴中より出土。　（友野）

2．石器類（第9図）

1は硬砂岩製の打製石斧。2は粘板岩製の打製石斧。3は硬砂岩製の大型の打製石斧。4は緑色岩製の磨石。5は硬砂岩製のこもで石で、重量は460ｇ、河原石を使用しており、所々に磨痕がある。6は硬砂岩製の磨石で、使用により表面が滑らかになっている。7は砥石。

第Ⅳ章　総括

本調査は平成3年度県営ほ場整備事業北の原地区の道路整備に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査報告書である。この項では調査中に得られた問題点の二、三について述べ総括としたい。

1． 赤須郷については、今日までいろいろな問題があり、多くの郷土史の研究者がそれぞれの立場で諸説を述べられているが、まだまだ資料的には問題が多い。しかし、少なくとも赤須郷の発生は平安時代までは遡らせることは可能だと思う。この中にある赤須城の築城された時期については、郷土史家である一志茂樹博士は太田切城が前身的なものではないかとの説を述べられたことがある。また、下伊那の市村咸人氏は、赤須城の築城型式から鎌倉時代以降ではないかと述べられた。駒ヶ根市教育委員会としては、これら諸氏の説をふまえ、赤須城の成立の時期を発掘を行って調査する方法をとることにした。

2． 市教育委員会では、この地区での開発に伴い、その都度でき得る限りの調査を行って来た。

まず、小城住宅団地造成（伴城平地区）の時で、この時は北側の一番外の堀である八の堀を発見することができた。また、その内側から鍛治の遺構が調査され、赤須城に関わるものとして注目された。

この調査がきっかけとなり、赤須城の全体の研究にはそれに必要な実測図が重要と考え、当時の吉沢館長が中心となり、気賀沢進・友野良一が手伝って赤須城研究の地図を作成した。

昭和54年度のほ場整備に伴う調査では、城に関わる縦堀の発見を中心として、その左右に掘立柱建物址、中世の住居址、土拡など数多くの城に関係する遺構が検出され、城の西側の範囲を知る上で重要な調査となった。

昭和62・63年度の調査は市道入口町線道路改良工事にかかわる発掘であったが、赤須城は何といっても本郭の築城年代が重要なポイントであるので、この点に特に注意して調査は行われた。

この結果、私共が考えていた鎌倉時代の遺物はついに検出されなかった。この事実から、今まで調査された箇所以外と言えば、今回調査された「室（むろ）」が赤須城の成立を解く鍵と考えて調査を行ったのである。

今回の調査では、城上井の東側に竪穴状遺構が発見された。遺構の東の柱穴から内耳鍋の破片が出土した。第1号住居址からは、16世紀の灰釉碗が検出された。第2号住居址は東西の壁と思われる箇所が発見された。出土遺物は16世紀代であって、中世代の竪穴住居址として注目に値す

る。その外、竪穴状遺構が検出された。

以上が今回の調査の成果である。これら諸遺構は何等かの形で城に関する遺構であることを確認することができた。こうした成果から「室」地区は赤須城の研究に最後に残された重要な場所であることを強調したい。以上所見を述べ総括とする。（友野）

註・参照文献

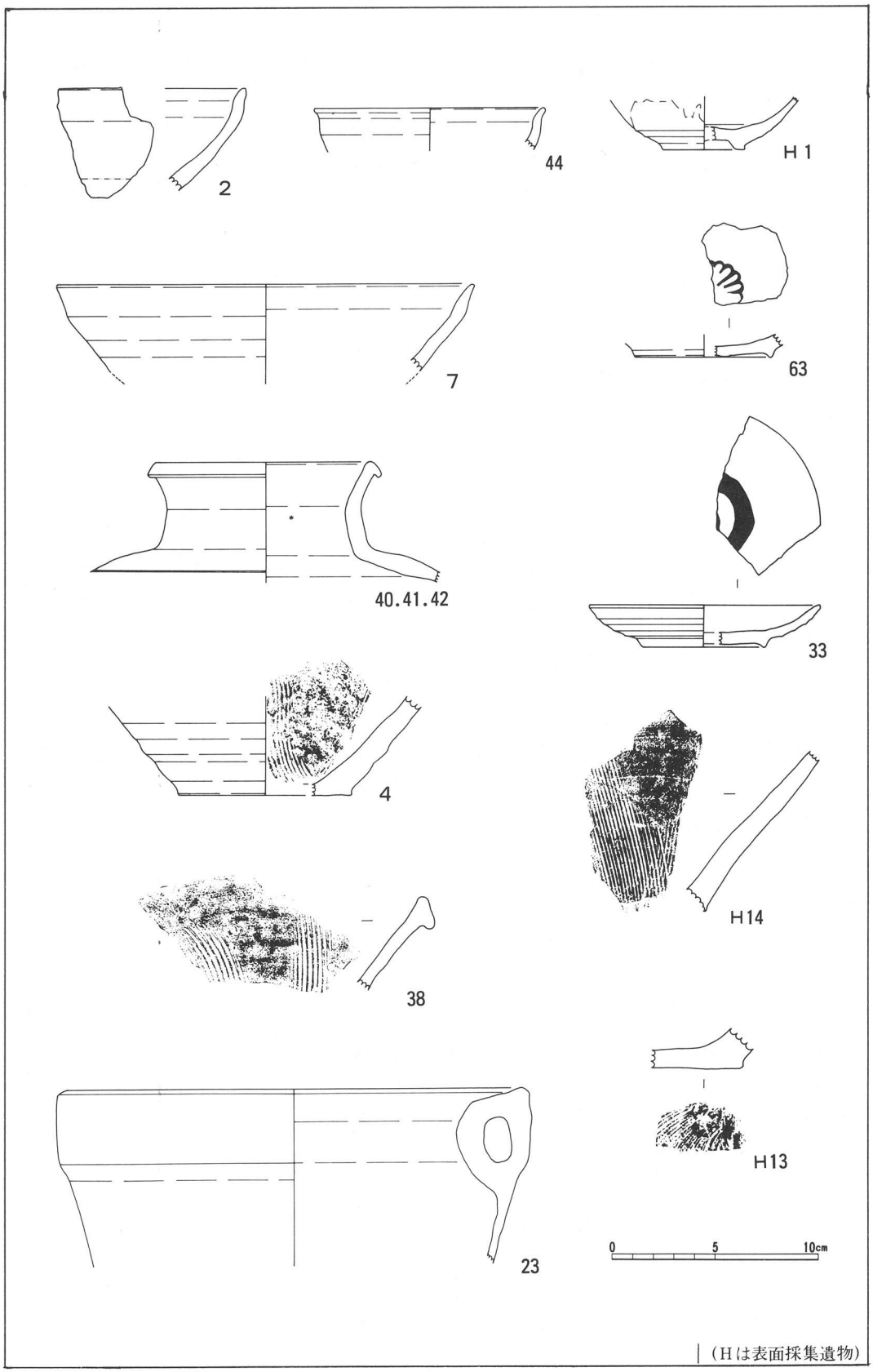
註１　現在天台宗末。城主赤須孫三郎が俊淵を請い、開基として、城の別名東光の城の名をとって東光山長春寺としたと伝えられている。天正10年織田の兵火に焼かれ、文録２年（1593年）現在の段丘下に再建したとされる。

註２　『上伊那郡史』には「…延元興國（1336～1345南朝）の頃片桐船山の城主兵庫頭為清の二男、片桐孫三郎為幸始めて此處に築城し赤須孫三郎と称し、子孫代々赤須孫三郎と號す。」とある。『上伊那誌』の記述もほぼ同様である。『片桐村誌』には「…信陽城主得替記によれば元久二年（1205年）片桐正綱の三男孫三郎正則が、赤須郷に分知して五百寛文を領し、在所地名をとって赤須氏を称した。…」とある。赤須氏始祖とその年代、新築城と赤須氏の関係、片桐氏支族土着以前の赤須郷の支配状況等不明確であり、今後の研究に期したい。

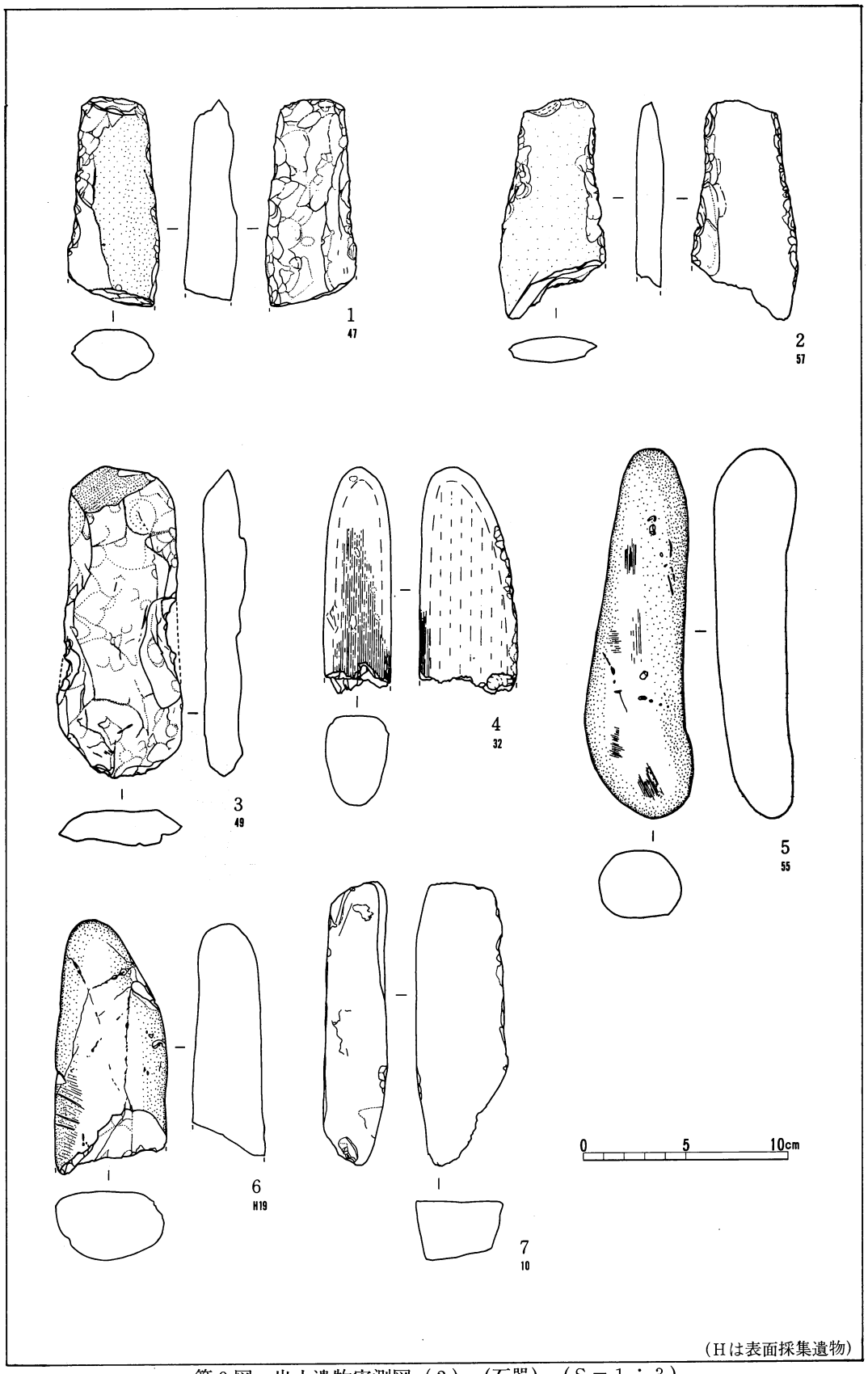
註３　『上伊那誌』と『赤須城跡（第２次）調査』とでは記載に相違があり、ここでは後者の記載によった。

註４　第一次調査報告では、小竪穴址、集石址、室状遺構等に分類しているが、この種の遺構類は機能的な分類も含め、十分な整理ができていない状況であるので、ここでは「竪穴状遺構」の名称を用いた。

唐澤貞治郎『上伊那郡史』1921年
村沢吟治郎『赤須上穂舊記録鈔』1939年
上伊那誌編纂会『長野県　上伊那誌　第二巻歴史篇』1965年
中川西公民館『片桐村誌』1966年
駒ヶ根市立駒ヶ根博物館『駒ヶ根の史蹟と文化財』1973年
伊那史料刊行会「信陽城主得替記（伊藤本底本）」『新編　伊那史料叢書㈡』1975年
県営ほ場整備事業大田切(3)地区埋蔵文化財調査会『日向坂・赤須城・七免川Ａ・七免川Ｂ遺跡』1980年
飯塚政美「中世竪穴状遺構の問題点㈠㈡」『伊那路』第30巻第５号　1986年
小山岳夫「大井城の竪穴状遺構」『長野県考古学会誌54号』1987年
駒ヶ根市教育委員会『赤須城跡調査報告書』1987年
赤須城跡発掘調査団『赤須城跡（第２次）調査』1989年
百瀬新治「中世掘立柱建物址の検討」『信濃』第41巻第４号1989年
駒ヶ根市誌編さん室『駒ヶ根市誌　古代・中世編、別編年表』1990年
佐久市教育委員会、佐久埋蔵文化財調査センター『金井城』1991年



第８図　出土遺物実測図（１）（陶器・土器）（Ｓ＝１：３）



第９図　出土遺物実測図（２）（石器）（Ｓ＝１：３）

出土遺物一覧表

No.	種　類	時　代	出土場所・遺構
1	天目茶碗	16C	N(2)-N(3)　2号住覆土
2	〃	〃	〃　〃
3	鉄釉擂鉢	16C	N(3)-N(4)
4	〃	15C	N(4)-N(5)　テラス状遺構
5	内耳土器	〃	N(2)-N(3)　2号住覆土
5′	灰釉皿	16C	N(5)-N(6)
6	鉄釉甕	15C	N(2)-N(3)
7	灰釉鉢	16C	〃
8	炭化物		N(4)-N(5)　松毬
9	内耳土器	15C	〃
10	砥石		〃
11	灰釉碗	16C	〃　テラス状遺構
12	鉄釉擂鉢	17C	〃　〃
13	鉄釉甕	17C以降	〃　〃
14	灰釉鉢	16C	〃　〃
15	鉄釉擂鉢	15C	〃　〃
16	甕		N(7)-N(8)　1号住
17	碁石？		N(4)-N(5)　テラス状遺構
18	内耳土器	15C	〃　〃
19	灰釉碗	16C	N(7)-N(8)
20	火打石？		N(9)-N(10)　2片
21	灰釉皿	16C	N(8)-N(9)
22	火打石？		N(9)-N(10)　柱穴中7片
23	内耳土器	16C	〃　柱穴中
24	炭化物		〃　柱穴中
25	骨		S4-S5　覆土
26	鉄釉擂鉢	15～16C	〃　〃
27	〃	〃	S6-S7　〃
28	灰釉皿	16C	S8-S9　〃
29	常滑甕	14C	〃　〃
30	擂鉢	16C	S9-S10　〃
31	天目茶碗	18C以降	〃　〃
32	磨石		〃　〃
33	志野釉皿	16C末	〃　〃
34	灰釉皿	15C	〃　〃
35	甕	14C	〃　〃
36	鉄釉擂鉢	16C	S4-S5
37	内耳土器	15～16C	S5-S6
38	鉄釉擂鉢	15C末頃	〃
39	〃	15C	〃　落ち込み内
40	常滑壺	14C	S6-S7
41	〃	〃	〃
42	〃	〃	〃
43	鉄釉擂鉢	15C	S7-S8
44	天目茶碗	16C末頃	S9-S10
45	鉄釉擂鉢	15C半頃	S10-S11
46	土師器坏	11C	〃
47	打製石斧	縄文	〃
48	鉄釉茶碗	15C	〃
49	打製石斧	縄文	S12-S13
50	内耳土器	15～16C	S13-S14
51	〃	〃	〃
52	灰耳土器	15C	〃
53	灰釉鉢	15～16C	〃
54	灰釉鉢	15C	S13-S14
55	こもで石		〃
56	内耳土器	15～16C	S14-S15
57	打製石斧	縄文	〃
58	灰釉皿	16C	〃
59	鉄釉擂鉢	15～16C	S15-S16
60	不明		S16-S17
61	鉢	明治以降	S22-S23　四の堀
62	不明		N2-N3
63	灰釉皿	16C	N3-N4
64	内耳土器	15C	N4-N5　竪穴状遺構2集石
65	灰釉鉢	〃	〃　溝状遺構覆土
66	土師器		〃　溝状遺構脇
67	鉄釉甕		N6-N7　四の堀
68	土師器坏		〃　〃
69	—		
70	内耳土器	15C	N9-N10　焼土分布の東側
71	鉄釉碗	18C以降	〃　〃
72	鉄製品		〃　〃
73	擂鉢	15～16C	〃　〃
74	鉄釉陶器		N7-N8　ピット中
	(以下表面採集遺物)		
1	灰釉碗	16～17C	
2	常滑甕	15C	
2′	灰釉碗	13～14C	
3	内耳土器	15C	
4	〃	〃	
5	不明		
5′	灰釉碗	16C	
6	灰釉皿	〃	
6′	内耳土器	15C	
7	碗		
8	内耳土器	15C	
9	黒曜石	縄文	
10	鉄釉陶器		
11	灰釉皿	15C	
12	鉄釉陶器	〃	
13	擂鉢	15～16C	
14	鉄釉擂鉢	〃	
15	〃	〃	
16	灰釉皿	15C	
17	甕		
18	甕	16C以降	
19	磨石		
20	天目茶碗	15C	
21	鉄釉甕	〃	
22	常滑甕	13～14C	
23	黄瀬戸碗	17C	
24	内耳土器	15C	
25	土師器	11C	
26	〃	〃	

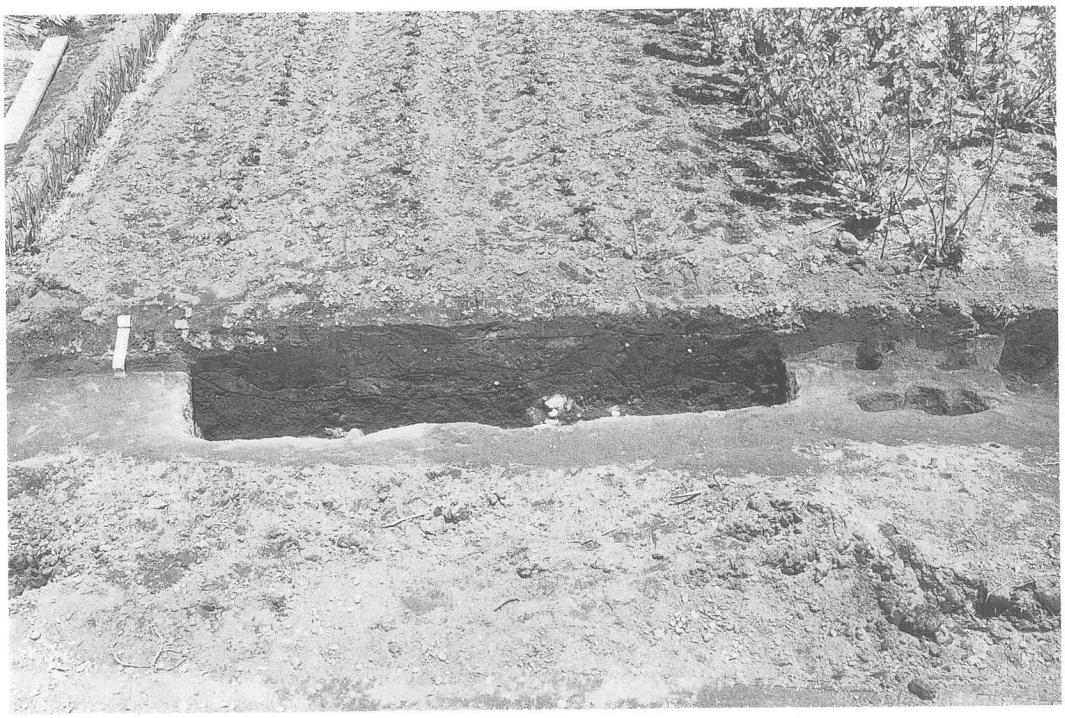
1.調査前風景（東から）

2.城上井付近（北から）

写真1

1.城上井肩部（西から）

2.竪穴状遺構１号（東から）



3.竪穴状遺構１号（南から）

写真２

1.城上井と竪穴状遺構１号

2.第１号住居址（南から）

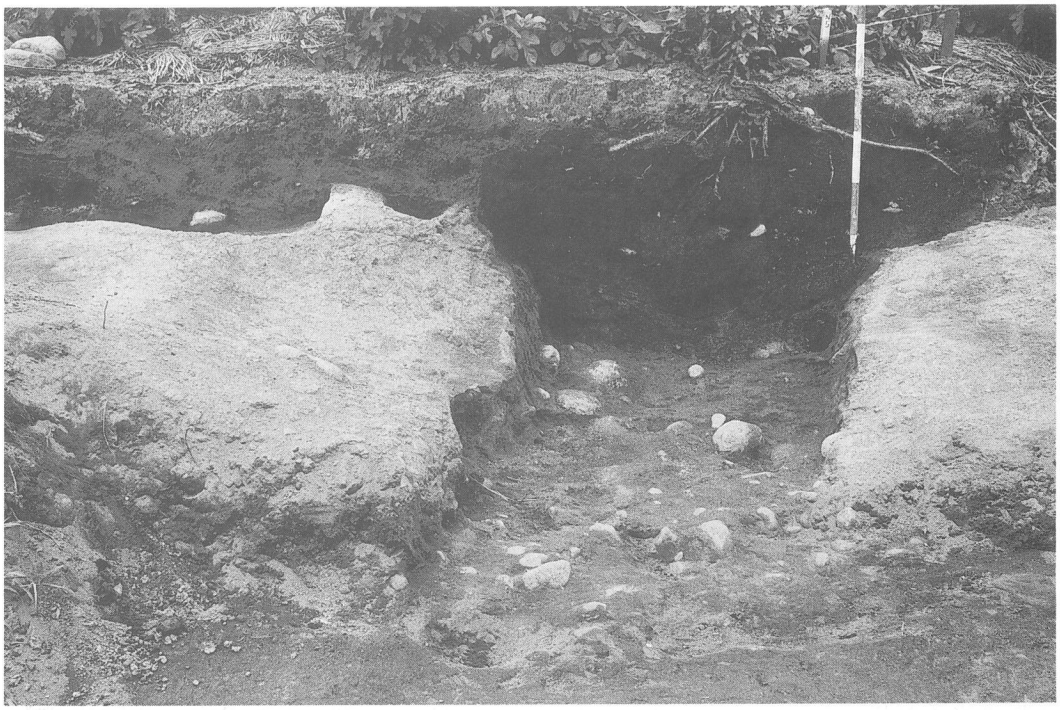
写真３

1.テラス状遺構（東から）

2.テラス状遺構（西から）

3.竪穴状遺構２号と溝状遺構（堀下げ途中 上から）

写真４



1.竪穴状遺構2号と溝状遺構（南から）

2.溝状遺構と四の堀

写真5

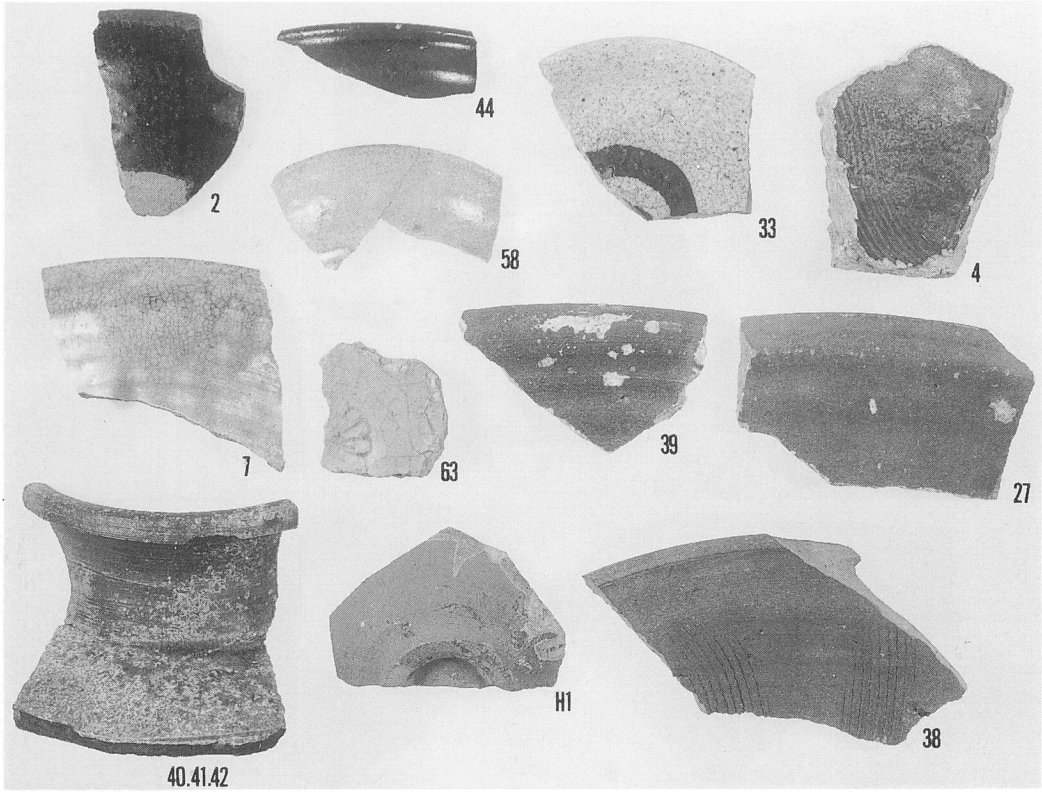
1.四の堀落込み（東から）

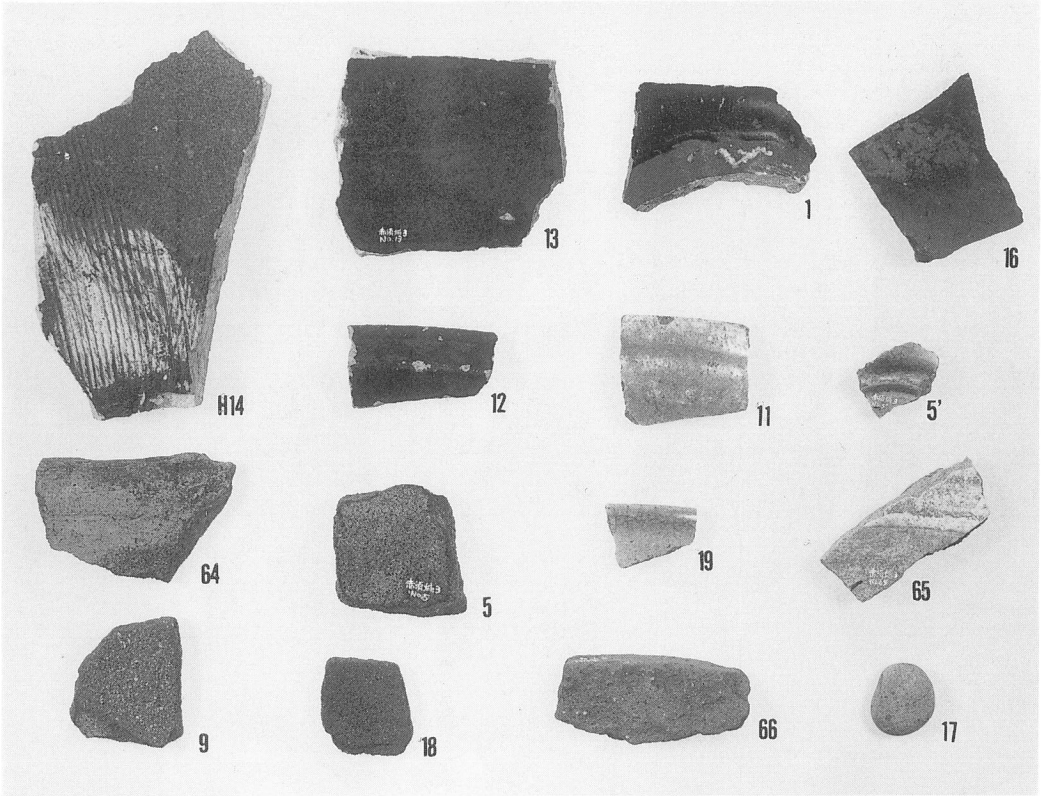
2.N10付近焼土分布（東から）

3.四の堀肩部と出郭（西から）

4.四の堀水路設置状況

写真6

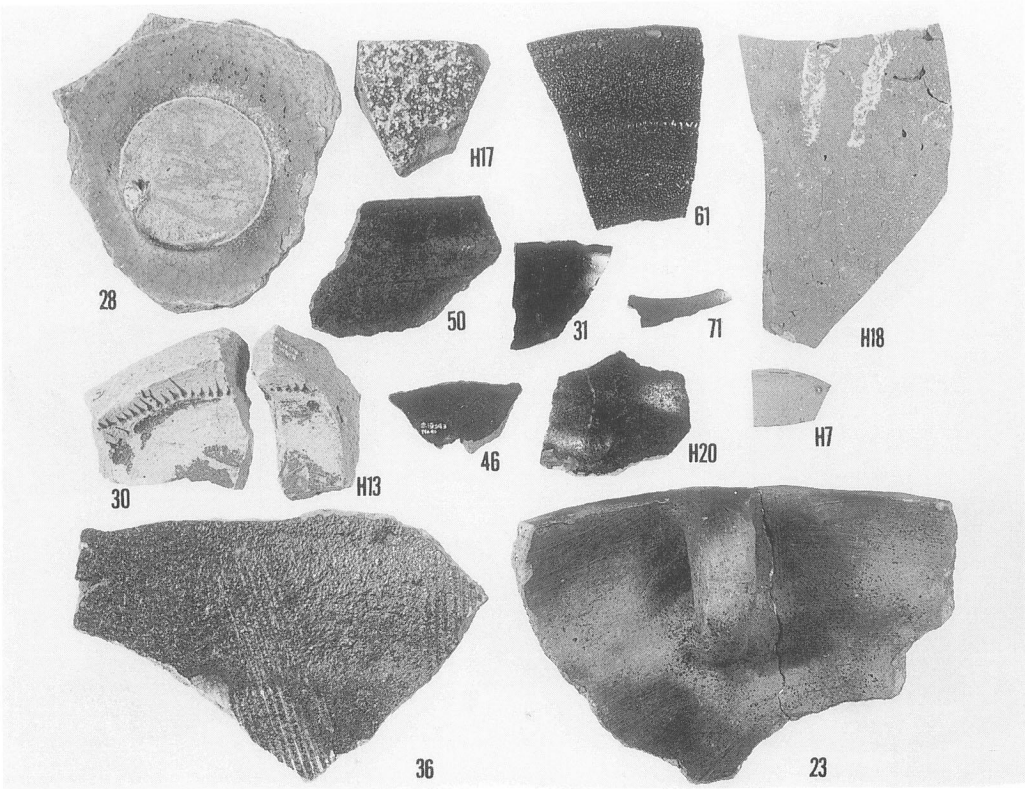


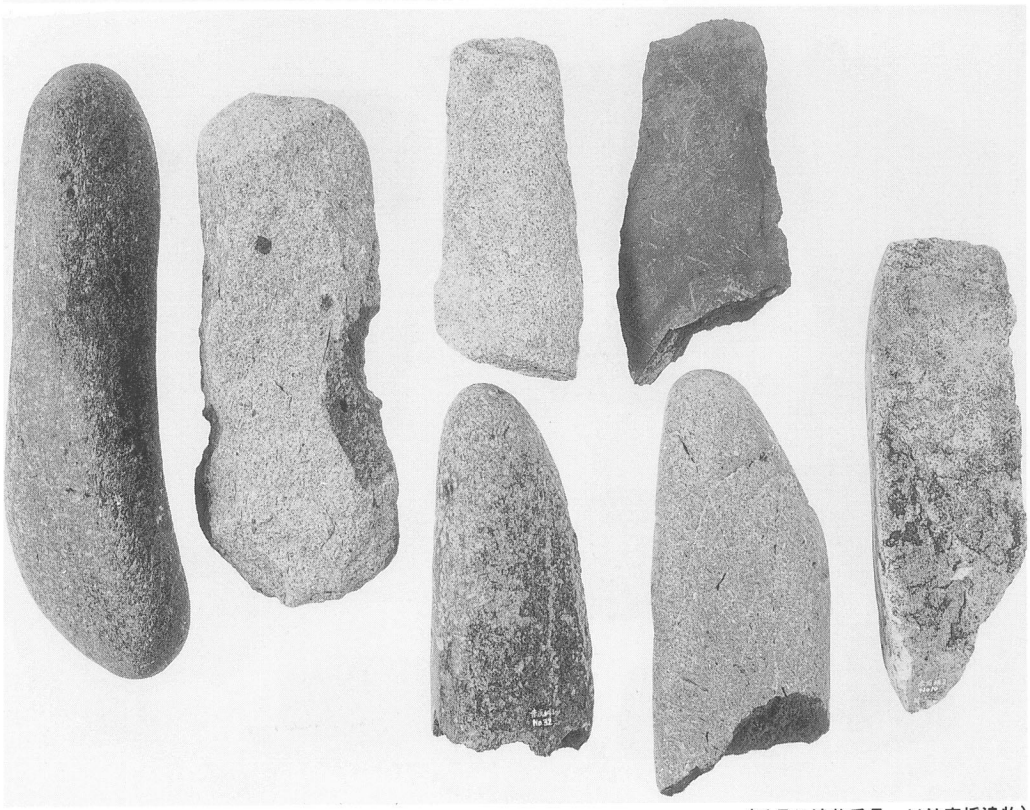


（番号は遺物番号，Ｈは表採遺物）

出土遺物（１）

写真７





（番号は遺物番号，Ｈは表採遺物）

出土遺物（２）

写真８

赤須城跡（第３次調査）

—緊急発掘調査報告—

平成４年３月10日　発行

編　　集　駒ヶ根市上穂栄町23番１号市立博物館内
　　赤須城跡第３次発掘調査団
発　　行　上伊那地方事務所
　　駒ヶ根市教育委員会
印　　刷　長野県駒ヶ根市赤穂4295
　　㈲宮沢印刷